

# 日本語における無生物主語他動詞文について —主語が事態発生の原因となる場合—

車 魯明

## On Transitive Sentences with Inanimate Subjects in Japanese Written Language -A Focus on the ‘Cause Subjects’-

CHE LUMING

### Abstract

The purpose of this paper is to examine the semantic characteristics of subject nouns in Japanese inanimate subject transitive sentences when the ‘subjects are the cause of the events’. In this study, we will find out criterions for determining the ‘cause subjects’ and, analyze the characteristics of the subjects and the characteristics of this kind of transitive sentence. The examples used and analyzed in this paper are extracted from ‘Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese’ (BCCWJ). The analysis shows that there are three semantic characteristics in the subject nouns: nouns representing events, nouns representing concrete objects, and nouns representing time / space. In addition, the classification in this paper is based on not only the lexical meaning of subject nouns but also the meanings expressed in this kind of sentence. Therefore, it is not always possible to draw precise lines between individual nouns. Even if the subject noun is an event noun, a noun representing a person's action or emotion, or a concrete noun, it may be recognized as a cause of the events.



## 目次

1. はじめに
2. 無生物主語他動詞文のタイプと本稿の立場
3. 先行研究と「原因主語」の判別
  - 3.1 先行研究
  - 3.2 「原因主語」の判別

4. 調査方法
5. 主語名詞の意味的な特徴
  - 5.1 主語名詞が出来事を表す名詞の場合
  - 5.2 主語名詞が具体物を表す名詞の場合
  - 5.3 主語名詞が時間／空間を表す名詞の場合
6. まとめ

## 1. はじめに

本稿は、日本語の無生物主語他動詞文のうち、次の例のような主語が事態を引き起こす原因あるいはきっかけとみられる場合について、無生物主語名詞の意味的な特徴を考察することを目的としている。

- (1) 沼田のこの童話は大学生の頃の習作だったが、好きな作品のひとつである、このあと、村の近くに大きな工場がたって、その廃液が海をよごし、魚を苦しめ、漁村の人を病気にする話になるのだが、それは童話にしてはあまりに辛い話になるので、切ってしまった。(深い河)

例(1)では、海が汚れたことや魚が苦しんでいること、さらに人々が病気になったことなど、種々の事態が引き起こされたのは、大きな工場から排出された「廃液」の影響であると考えられる。即ち、この場合の主語名詞「廃液」は海が汚れたことなどの原因である。本稿では、このタイプの無生物主語他動詞文を「原因主語」タイプと呼び、考察の対象にする。

## 2. 無生物主語他動詞文のタイプと本稿の立場

上の例(1)のようなタイプ以外に、無生物主語他動詞文にはほかにいくつかのタイプ(主要なタイプとして3つ挙げられる)が存在することが観察された。筆者は、無生物主語他動詞文の実例を分析することによって、それらの許容される条件を考察している。本稿はその一環であり、主に例(1)のような文を考察

するが、実際の考察では、他のタイプに触れることがあるため、本論に入る前にまず、その他のタイプを紹介し、そして本稿の立場を示す。

車(2018)では、無生物主語他動詞文が許容される条件を考察する際に、3つの場合をあげている：「人に準じるものが主語に立つもの」(例(2))、「事実上人の行為の表現になっているもの」(例(3))、「事実上自動詞述語文に相当するもの」(例(4))。

- (2) 平成七年(千九百九十五)正月十七日、今度は金兵衛の遺品を守りながら芦屋で生活していた金兵衛の子孫たちを阪神淡路大震災が襲った。(幕末明治横浜写真館物語)
- (3) たった今、部族の長達による談合が終わったところであった。彼らは長いコートの裾を翻して自分達のヤクトに駆け寄ると、それぞれの部族に指示を下すべく、陽炎の立つ砂の丘陵に、姿を消していった。その光景を、一対の炎のような琥珀の目が見つめていた。(黒炎の貴公子)
- (4) ただ結論だけ述べるなら、渋沢が三菱の岩崎弥之助に敗れ、兜町の時代は終わり、三菱による丸の内の時代が幕をあける。(江戸・東京を造った人々)

上の例(2)～(4)のような無生物主語他動詞文の成立について、車(2018)では次のように述べている。

例(2)では、主語名詞「阪神淡路大震災」は自然現象(自然災害も含む)を表す名詞であり、自然界の法則によって発生し、人の力や外部からの力を借りずにそれ自体に備わっているエネルギーによって他

者（「金兵衛の子孫たち」）に影響を及ぼすことが可能である。この意味で「大震災」のような自然現象名詞は、「人が他者（その他の人や物）に作用する」の「人」のような働きを果たしているといえる。例（3）の主語名詞は「目」であるが、実際「その光景を見つめていた」という動作を行うのは「目」の持ち主の人である。例（3）のような文は、文中に現れないものの、文外に動作を行う人が想定可能であり、事実上一種の人の行為の表現であるといえる。例（4）では、目的語名詞と述語他動詞との組み合わせ「幕をあける」は一つの決まった言い方であり、意味的に自動詞「始まる」に相当すると考えられる。言い換えれば、「三菱による丸の内の時代が幕をあける」は自動詞文「三菱による丸の内の時代が始まる」とほとんど変わらない意味を表しているのである<sup>1</sup>。

車（2018）の記述から、例（2）の主語名詞「阪神淡路大震災」と、例（3）の主語名詞「目」は文中で「行為者」としての役割を果たし、例（4）の主語名詞「丸の内の時代」は「幕が開く」の変化主体として考えられるといえる。

一方、本稿の考察対象である「原因主語」タイプについて、車（2018）では少し触れているだけでそれ以上の分析はしていないが、このタイプの主語名詞の文法的な意味は、車（2018）であげた3つの場合と異なっている。例えば、下記の例（5）と例（6）の下線の無生物主語他動詞文は、主語名詞が同じ自然現象名詞であるものの、文中ではそれぞれ異なる役割を果たしているといえる。

- (5) 平成十年においては、8月から十月の間に豪雨が日本各地をおそい、河川の氾濫、土砂崩れ、地滑り等、多くの災害を引き起こした。（消防白書）
- (6) 雨に煙る河原へ眼を凝らしたのは真牙多だ。「まだ、見える…」雨音が真牙多の声を掻き消した。（平将門）

例（5）では、主語名詞「豪雨」は自ら備わってい

るエネルギーによって他者「日本各地」に作用することが可能であり、事態の発生を直接に引き起こすものであるといえる。例（5）は車（2018）でいう「人に準じるものが主語に立つもの」のタイプに属し、主語名詞「豪雨」は文中で「行為者」としての役割を果たしている。それに対して、例（6）では、主語名詞「雨音」は自然現象名詞ではあるが、その内からエネルギーを発して、「真牙多の声」に作用することは考えにくい。それより、この場合の「雨音」の果たした役割は、その文において、「真牙多の声を掻き消した」との関係から解釈されるというほうが適切であろう。即ち、「雨音」は、「真牙多の声を掻き消した」事態を引き起こした行為者ではなく、その存在（あるいは雨の音が大きいということ）によって、「真牙多の声が聞こえなくなった」というような事態が引き起こされたという「原因」としての役割を果たしているということである。

そのことは、次のような現象からも明らかである。例（6）「雨音が真牙多の声を掻き消した」は、次の（6'）のような原因を表す「〇〇ため」に言い換えられる。しかし、例（5）「豪雨が日本各地を襲う」は（6'）のように言い換えられず、日本語（現代語では）として不自然であると判断される。ちなみに、例（5）の後半の「豪雨が多くて多くの災害を引き起こした」は「豪雨のため、多くの災害が引き起こされた」に言い換えられ、原因結果関係をなしているといえる。

（6'）雨音のため、真牙多の声が掻き消えた。

（5'）豪雨のため、日本各地が襲われた。

このように、上の例（6）、及び第1節であげた例（1）のような無生物主語他動詞文は、車（2018）で記述した3タイプと違って、別に検討する必要がある。

### 3. 先行研究と「原因主語」の判別

#### 3.1 先行研究

どのようなものが原因とみなせるか、その「原因主語」の判別を、先行研究を参考にしながら考えてみ

る。事態発生の原因が主語となる場合があることを指摘している先行研究としては、吉川（1976）、佐藤（1990）、影山（1996）、青木（2006）、早津（2016）があげられる。以下では、主に公刊年次順で紹介するが、そのうち、佐藤（1990）と早津（2016）は使役文を対象に論じられているため、本節の最後にまとめることにする。

#### ・吉川（1976）

吉川（1976）では無生物主語他動詞文を「形状描写・関係描写の表現」「疑似他動詞構文」「自然界の動きの表現」「付帯的狀態の表現」「人間が関与する表現」と「原因構文」の6種類に分けている。そのうちの「原因構文」については、「これは「泣き声が父や母を集まらせた」「灰が積もって、作物を枯らした」のように、ある動作・作用の原因となっているものを主語にする表現のことである。この文を言いかえると、「泣き声を出したので父や母が集まってきた」「灰が積もって、そのために作物が枯れた」となると思う」（p. 135）と述べ、次の対応関係を示している。

〔物／事〕ガ 〔人／物〕ヲ （他動詞）又は（使役形）⇔  
〔原因〕ノタメ 〔人／物〕ガ （自動詞）

吉川（1976：136）

#### ・影山（1996）

影山（1996）では、自動詞から派生する2種類の他動詞、-as-, -os- 他動詞（鳴らす、飛ばす、起こすなど）と-e- 他動詞（建てる、進める、並べるなど）との意味的な違いを議論する際に、主語の位置に立つ名詞によって両者が区別されると指摘し、前者（(137)のような例）は個体（意図的な行為者）のほかに出来事や行為を表すような名詞でも可能であり、後者（(138)のような例）は個体に特定すると述べている。

- (137) a. {彼は／雨が} 傘を濡らした。  
b. {子供が／日照りが} 花を枯らした。  
c. {子供が／突風が} ブランコを揺らした。  
d. {父親が／電話のベルが} 子供を起こした。

- e. {部下が／彼の不注意が} 秘密を漏らすことになった。  
f. {運転手が／事故が} 電車を遅らした。  
(138) a. {大工さんが／\*彼の持ち家願望が} 家を建てた。  
b. {子供が／\*電車の振動が} 石を並べた。  
c. {潜水艦が／\*? 火災事故が} 商船を沈めた。  
d. {市民団体が／\*政治家への不信が} デモ行進を続けた。  
e. {父が／\*地震の揺れが} 壁に穴を空けた。  
f. {彼女は／\*彼のいたずらが} 顔を赤らめた。  
g. {子供が／\*子供の不注意が} 石鹸を泡立てた。

影山（1996：196）

また、-as-, -os- 他動詞の場合、例えば、例（137）aの「雨が傘を濡らした」は「雨が原因で、傘が濡れた」<sup>2</sup>のように、「～が原因で」に言い換えられることができるのに対して、-e- 他動詞の場合、言い換えは認められないという。それは-e- 他動詞の場合、「主語になる行為者が（故意であれ不注意であれ）事態の発生を直接的にコントロールしている。（中略）CONTROLの主語は出来事や行為ではなく、個体（人間）そのものである」（pp. 197-198）ということによるからと指摘している。

#### ・青木（2006）

青木（2006）では他動文のうち、典型的な他動文から外れる「原因主語他動文」が存在すると指摘し、その「原因」について次のように規定している。

- (3) a 電話のベルが子供を起こした。  
b 父の死が太郎を悲しませた。  
c 待ち合わせの時間に遅れたことが彼女を怒らせた。

これらの他動文における主語名詞句は、いずれも〈行為者〉ではない。「電話のベル」「父の死」「時間に遅れた事」といった「出来事」が主語となっており、これらは、「子供が起きる」「太郎が悲しむ」「彼女が怒る」という事態を引き起こす〈原因〉というべきものである。このようなタイプの文を、ここでは「原因主語他動文」と呼ぶことと

しよう。 青木 (2006: 275)

青木によると、この原因主語名詞句は「嵐」「音」のような《コト》の場合と、「若菜」「作りたるもの」のような《モノ》の場合がある。《コト》主語の場合、「風」「嵐」のような自然現象が多いとされ、その理由として「これらの自然現象は、古代人にとって非常に身近なものであり、「自然現象がある事物に影響を及ぼす」という事態もまた、身近に感じられるものであったためと考えられる」(p. 281) と述べている。また、より《コト》性の高い名詞句が主語となる例は非常に稀であるという指摘もある。

それに対して、後者の「若菜」のような《モノ》主語名詞はそのモノの属性などによって「原因」として機能するという。

- (15) a 電車は東京市の交通を一変させた。  
 b そこに脱ぎ捨ててある普段着は益々葉子の想像を擅まにさせた。  
 「電車」「普段着」は《モノ》であり、何らかのはたらきかけを行っているわけではない。それらの属性((15a)なら交通網の一つといった属性)が、事態を引き起こす〈原因〉として機能しているのである。 青木 (2006: 281)

また、この「原因主語他動文」の主語名詞句は「によって」に言い換えられると指摘されている。例えば、「涙が袖を濡らす」は、「涙によって袖が濡れる状態になる」という意を表しているといえる」(p. 278) と述べている。

#### ・佐藤 (1990)

佐藤 (1990) では非情物主語の使役文について、「主語の位置に物名詞や出来事名詞をすえた使役文は、ひろい意味での因果関係を表現している」(p. 103) とし、その主語は「原因」として機能することについて、「(前略) 因果関係の使役のように、物名詞や出来事名詞が主語になるばあいには、そのものの状態や性質やうごき、

出来事の内容をさししめすが必要になる。(中略) 文は、物を特徴づけるだけでなく、物の状態、性質、うごきをも特徴づける。特徴づけをうける状態、性質、うごきは原因的なできごととして主語の位置にあらわれる。」(p. 109) と述べている。また、使役の主体も使役の客体も非情物である場合の因果関係の使役文を次の6種類に分けている。各種類の例文はそれぞれ1例をあげる。

- a. 《現象》が《現象・物》を  
 181) 夜、月が数々の葉末を剣のように光らした。(野火・48)
- b. 《現象》が《作用のおよぶ場所》を  
 189) 夜はもう遅いらしく、月が出ていた。弱い斜めの光が、海面を銀に光らせていた。(野火・84)
- c. 《できごと》が《組織・団体》を  
 199) (前略) 世界情勢の急変が、モスクワをふいに硬化させたのだ。(光る声・17)
- d. 《ことがら》が《ことがら》を  
 207) こういう人工的な真空地帯化は、当然、その中に深い頹廢をはらみ、それを発展させる。(真空地帯・上・236)
- e. 《属性・要素・側面》が《全体》を  
 213) (前略) 貨幣制度はやがて人間社会を崩壊させるかもしれない。(その最後の世界・159)
- f. 意味づけ  
 218) 額にも頬にもやがて消えてゆく不鮮明なしわが、獣じみた肉感をにじませている。(女坂・184)

佐藤 (1990: 142-147)

#### ・早津 (2016)

早津 (2016) では心理変化や生理変化の引き起こしを表現する使役文の主語について、次のように述べている。

心理変化や生理変化は、他者 (他の人や事物)



からの意図的（要求的・許可的）な働きかけによるのではなく、他者のもつ何らかの性質や状態が人に原因的に影響して生じるというのがふつうである。（中略）したがって、心理変化や生理変化の引きおこしを表現する使役文の主語は、誘因として影響を与える種々の物や事柄を表す事物名詞であることが多い（95）（96）。主語が人名詞であることもあるが（97）、その場合でも、相手の変化を積極的に引きおこそうとする意志的な存在としての人ではなく、相手に影響を与える性質を備えた存在としての人である。

- (95) その豹変ぶりが、なぜか私をときどきさせた。  
（北帰行）
- (96) 石井の『十日間世界一周』や『漂流奇談全集』は、明治期後半に少年の血を湧かせ、〔\*少年を湧かせ〕（寿岳文書集）
- (97) 剛情なお島は……養父の怒を募らせてしまった。〔\*養父を募らせてしまった〕（あらくれ）  
早津（2016：158）

### 3.2 「原因主語」の判別

第3.1節で挙げた先行研究は多少にかかわらずどれも「原因主語」について言及している。

吉川（1976）では、無生物名詞が事態発生の原因となり、他動詞文の主語に来ることがあると指摘し、物／事主語他動詞文（使役文）は「〔原因〕ノタメ〔人／物〕ガ（自動詞）」に言い換えられると指摘している。

影山（1996）では、-as-, -os- 他動詞（鳴らす、飛ばす、起こすなど）文の主語の位置に立つ名詞は出来事や行為を表す名詞が可能であると指摘し、これらの名詞は原因としても機能すると指摘している。さらに、「雨が傘を濡らした」は「雨が原因で、傘が濡れた」（p. 197）のように、「～が原因で」に言い換えられることができると述べている。

一方、佐藤（1990）、青木（2006）、早津（2016）では主語の位置に現れる名詞が原因として認められるものの特徴が指摘されている。それは、この種の名詞に

何かの特質があり、且つその特質によって他者に影響を及ぼすということである<sup>3</sup>。また、青木（2006）では、主語名詞の意味的な特徴以外に、「によって」に言い換えられると指摘されている。

本稿では、主語の位置に現れる無生物名詞（以下「主語名詞」とする）が「原因」<sup>4</sup>として機能するかどうかの判別は、意味と形式からそれぞれ行う。

まず、意味的な特徴から判別する。「原因主語」は「行為者」主語とは言えない場合のものを指す。

筆者のいう「行為者」は、無生物であるものの、自ら備わっているエネルギーを発して、他者に働きかけることができ、その意味で人（生物）に準じるものである。それに対して、「原因」はそのような働きかけが見られない。第1節の例（1）と第2節の例（2）を再度比較すると明らかである。（以下では、例（1）～（2）における下線部の文のみ再掲する。）

- (1) その廃液が海をよごし、魚を苦しめ、漁村の人を病気にする
- (2) 芦屋で生活していた金兵衛の子孫たちを阪神淡路大震災が襲った。

第2節でも述べたように、例（2）の主語名詞「大震災」はそれ自体にエネルギーが備わっていて、外力を借りずに他者に影響を及ぼすことができる。この意味で「大震災」は「行為者」の役割を果たしているといえる。それに対して、例（1）の主語名詞「廃液」は、それ自体は他者に影響を及ぼす力がなく、「廃液が海を汚す」などの文において、「海を汚す」などの事態が引き起こされる「行為者」ではなく、「原因」である<sup>5</sup>。

次に、形式から判別する。主語が「行為者」の役割を果たしていない文を、原因を表す「〇〇ため」に言い換えられるかどうかで判別する。第2節で述べたように、「原因主語」タイプの文は「〇〇ため」に言い換えられるが、主語が「行為者」であるタイプの文は言い換えられない。（第2節の例を再掲する）

(6′) 雨音が真牙多の声を掻き消した≡雨音のため、真牙多の声が掻き消えた。

(5′) 豪雨が日本各地を襲う≠豪雨のため、日本各地が襲われた。

以下、考察に使用する事例は、ネイティブ1名のチェックを得たものである。なお、「ため」に言い換えにくい場合、「によって」を使って判断してもらった。言い換えられる場合は「原因主語」タイプとみる。例えば、「一刻も早い情報の伝達や収集が生死を分ける」(消防白書)は、「一刻も早い情報の伝達や収集によって、生死が分かれる」に言い換えられると判断され、主語名詞「一刻も早い情報の伝達や収集」は、この文において「原因」の役割を果たしているということである。

#### 4. 調査方法

本稿は考察にあたって資料として使用している無生物主語他動詞文の実例は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』<sup>6</sup>の検索アプリケーション「中納言」(通常版)(BCCWJ - NT、以下BCCWJとする)を利用して収集したものである。調査手順は以下のとおりである。

まず、キーワードとなる他動詞を得るために、予備調査を行った。予備調査では文学作品13点から無生物主語他動詞文を構成する他動詞を抽出し、検索のリストを作る。この予備調査では合わせて他動詞133語を得た。

開ける、上げる、与える、温める、圧迫する、浴びる、表わす、暗示する、威圧する、意味する、彩る、受ける、失う、歌う、打つ、映す、裏付ける、描く、追いつく、追い詰める、追い抜く、追う、覆う、行う、収める、押す、襲う、落とす、帯びる、下ろす、変える、抱える、掻き消す、隠す、囲む、飾る、掠める、語る、刻む、傷付ける、切り裂く、強調する、区切る、擦る、下す、蹴飛ばす、蹴る、壊す、遮る、下げる、支える、さす、擦る、冷ます、刺激する、縛る、示す、遮断す

る、象徴する、吸い取る、透かす、救う、染める、叩く、立てる、保つ、散らす、直撃する、使う、掴む、作る、告げる、伝える、包む、包み込む、募る、潰す、強める、吊り上げる、連れ戻す、照り返す、照らす、転換する、唱える、止める、捕らえる、取り巻く、無くす、慰める、撫でる、残す、乗せる、伸ばす、濡らす、弾く、放つ、引き受ける、引き起こす、浸す、冷やす、含む、塞ぐ、振る、包囲する、解す、掘り返す、撒き散らす、巻き戻す、巻く、増す、守る、見下ろす、見据える、見せる、満たす、見詰める、迎える、齎す、持つ、求める、戻す、貰う、揺らす、許す、喜ぶ、揺さぶる、揺るがす、宿す、汚す、呼び出す、呼び止める、呼ぶ、分ける

次に、以上の他動詞をキーワードとし、「中納言」(通常版)に入力して検索を行う。各他動詞から得られたデータをもとに手作業で無生物主語他動詞文を抽出する。

BCCWJにおける検索条件の設定は以下のとおりである。

##### 短単位検索

・キー：語彙素が(指定した他動詞)<sup>7</sup>

・検索対象：

出版・新聞(コア非コア)、出版・雑誌(コア非コア)、出版・書籍(コア非コア)、図書館・書籍(非コア)、特定目的・白書(コア非コア)、特定目的・ベストセラー(非コア)、特定目的・知恵袋(コア非コア)、特定目的・ブログ(コア非コア)、特定目的・法律(非コア)、特定目的・国会会議録(非コア)、特定目的・広報誌(非コア)、特定目的・教科書(非コア)

上の手順について一つ例をあげて説明すると、例えば、予備調査で小説『WILL』から「重苦しい沈黙が店内を包んだ。」という無生物主語他動詞文を探し出し、その述語他動詞「包む」を「中納言」のキー欄に入力して検索するということである。

BCCWJを検索した結果、133語で合計957,661例

が検索された。調査の便宜上、実例数 1 万以上例がある他動詞の場合、「中納言」(通常版)の出力順の上位 1,000 例<sup>8</sup> を取ることにした。結果、合計 303,639 例を得た。その中から無生物主語他動詞文は 6,563 例を抽出した。本稿の考察対象にあたる「原因主語」と判断される他動詞文はそのうちの 1,266 例、全体の約 2 割 (19.3%) を占めている<sup>9</sup>。

## 5. 主語名詞の意味的な特徴

本節では主語名詞の語彙的な意味の特徴の分類から出発し、これらの主語名詞がどのように事態が発生する原因としての役割を果たしているかについてそれぞれみていく。

主語名詞の語彙的な意味の特徴から、次の 3 つのタイプに分ける。

- ・主語名詞が出来事を表す名詞の場合
- ・主語名詞が具体物を表す名詞の場合
- ・主語名詞が時間／空間を表す名詞の場合

### 5.1 主語名詞が出来事を表す名詞の場合

主語の位置に出来事を表す名詞(以下「出来事名詞」とする)が現れる他動詞文は、原因主語他動詞文の中で実例の数が最も多く(1,266 例のうちの 1,008 例<sup>10</sup>)、基本的な位置を占めているといえる。その出来事名詞には、物や事の変化を表すもの、特定のある人の行為あるいは不特定多数の人の行為を表すもの、人の心理状態や心理活動、感情あるいは感覚などを表すものと、物の性質を表すものがある。これらの出来事名詞をそれぞれ①変化、②行為、③人の内的な性質、④現象(物の性質を含む)、と呼ぶことにする。

#### ① 変化

本稿でいう「変化」を表す名詞(以下「変化名詞」とする)は物や事がある状態から他の状態に変わるという意味での名詞のことを指す。「変化」「減少」「上

昇」「成長」などの名詞はそれにあたる。また、宮腰(2012)の記述を参考にして、物や事の「発生」と「消滅」も「変化」とみなす<sup>11</sup>。

- 1) 社会的地位の変化によって性転換する場合は、他個体との関係の変化が脳を刺激し、脳からホルモンが分泌されて、やがて生殖腺に影響を与えると考えられるが、脳で何が起きているのかについてはまだ詳しいことはわかっていない。(性転換する魚たち)
- 2) 日本内航海運組合総連合会と荷主業界との間の話し合いにより、運賃水準は維持されたものの、2 年連続の荷動き量の減少と船員費及び数次にわたる燃料油の上昇が内航海運業の経営を大きく圧迫した。(運輸白書)
- 3) 森の破壊で土壌が劣化した農村の事情をさらに悪化させたのが、この気候の寒冷化だった。イギリスの小麦の生産量は地力の低下と気候悪化の中で、著しく低下した。この小麦の生産量低下は、小麦価格の高騰をもたらし、都市市民の台所を直撃した。(気候変動の文明史)
- 4) しかし、都府県においては、地価の高騰が農地の資産的保有傾向を強め、また、農業所得が低い場合でも兼業所得の増加によって経営を維持することが可能となったことから、農地の流動化は停滞したものとなった。(農業白書)

このタイプの名詞が主語の位置に現れる他動詞文では、主語名詞であるものに増加や減少、あるいは新しいものの出現などという変化が発生し、目的語名詞の指すものがその変化の影響を受けたり、場合によって目的語名詞の指すものが変化したりすることが表現される。上の例 1) では、「他個体との関係」に変化が生じ、それが原因で脳に影響が及んだと考えられる。また、目的語名詞「脳」に果たしてどんな影響が及んだかについて、後接の文脈から読み取れる。例 2) ～ 例 4) においても主語名詞が事態発生の原因として解釈できると言える。例 2) では、「2 年連続の荷動き量」の減



少と「船員費及び数次にわたる燃料油」の上昇という2つの変化によって「内航海運業の経営」に、通常の状態から「圧迫された」（あるいは「厳しくなった」）状態に変化したという影響をもたらしたといえる。例3)では、「小麦の生産量」が低下することが原因で、「小麦価格」に「高騰した」という結果をもたらした。例4)では、「地価」が上がった影響で、「農地の資産的保有傾向が強まった」という変化をもたらしたといえる。

また、変化の主体はほとんどの場合、修飾要素によって表される。上記の例1)～4)の主語名詞「変化」、「減少」、「上昇」、「低下」、「高騰」の主体はそれぞれその直前の「他個体との関係」、「2年連続の荷動き量」、「船員費及び数次にわたる燃料油」、「この小麦の生産量」、「地価」である。

変化の影響を受けるものは目的語名詞（ヲ格名詞）の指すものでない場合もある。その場合、影響を受けるものは二格名詞で示される。例えば、例5)では「あなたの変化」の影響を受けたのは二格名詞「魂」であり、例6)では「ドイツの分断」の変化によってもたらされた「新しい教訓」という影響を受けたのは「世界」である。

- 5) そしてその問題に霊的に解決をみた時に、この肉体を離れるかどうかの選択を迫られる時があります。あなたにとっての究極の選択かもしれません。あなたの変化が魂に変化をもたらし、肉体を抜けるかどうか決める時が来たことを伝えているのです。（ジェームス・ハーティーからの贈り物）
- 6) ドイツの分断は、世界に新しい教訓をもたらした。それは、政治・社会体制を異にする分断国家の成立は、必ずしもその国家間の統一運動を促進することにはならず、まして武力による統一は世界の平和に対する脅威としてきびしく否定される。（経済国防論）

最後に、「消滅」と「発生」という意味を表す場合の例を見てみる。次の例7)の主語名詞「流失」は、

物や事が有から無への変化—「消滅」という意味での変化であり、例8)の主語名詞「出現」は物や事が無から有への変化—「発生」という意味での変化である。例7)では、優秀な社員を失うことが原因で、周囲の社員に悪影響をもたらしたことが表され、例8)では、テレビの出現が原因で、酪農家を楽しませたことが表現されているといえる。さらに、この二例においても、上の例5)、6)と同様、変化の影響を受けたものは二格名詞（例7)では「周囲の社員」で、例8)では「酪農家の生活」である）によって示されている。

- 7) 優秀な人材にはヘッドハンター、リサーチエージェントなどを通じて市場からよく声がかかり、貴社で提供している年収の数倍の金額が提示されることさえある。そればかりか、優秀な社員の流失が周囲の社員に喪失感をもたらし、士気を低下させ、その結果、連鎖的離職が発生することもある。（明日のリスクは見えていますか？）
- 8) この年は電化元年と言われる。また、テレビの出現が、酪農家の生活に娯楽をもたらした。（北海道酪農の生活問題）

## ② 行為

「行為」を表す名詞が主語となる場合、車（2018）でいう「事実上人の行為の表現になっているもの」タイプと解釈される場合もあれば、「原因主語」タイプと解釈される場合もある。両者の相違は次の例9)と例10)を比較してみれば明らかである。

- 9) しかも、赤ちゃんが足を蹴り上げるたびに蹴りが胃を直撃し、激痛です。（Yahoo! 知恵袋）
- 10) 飲酒のポイント 少量の飲酒は<sup>ママ</sup>血圧を下げますが、大量の飲酒は血圧を下げます。（広報あいづみさと）

例9)では、主語名詞「蹴り」という動作の背後には動作主の赤ちゃんが存在する。しかし、その赤ちゃん

んを構文上主語の位置に立てず、「胃を直撃する」ことを直接に引き起こす赤ちゃんの動作「蹴り」だけを切り取って表現されている。このタイプの他動詞文は車(2018)であげた「事実上人の行為の表現になっているもの」の場合に属する。一方、例10)では、主語名詞「飲酒」は「血圧」に働きかけ、血圧を下げようとする人間の操作だと考えにくい。「飲酒」は人の行為であるが、この場合は少量(或いは大量)というふうの特徴づけられて、血圧が下がる原因とみるのがより妥当であろう。

例10)「飲酒」の他に、「行為」「行動」「政策」「破壊」などの名詞を「行為名詞」とみなす。それら行為名詞の主体をさらに詳しく観察すると、特定のある個人の行為を表すものもあれば、不特定多数の人(例えば組織・機関名詞)の行為(あるいは複数の行為)を表すものもある。次の例11)～15)は前者で、例16)～20)は後者である。なお、個人の行為であれ、多数の人の行為であれ、目的語名詞(ヲ格名詞あるいは二格名詞)の指すものに働きかける種類のものではなく、その行為が実行されることが原因となり、目的語名詞の指すものに何等かの影響を及ぼしたものであると考えられる。

- 11) 山科の由良助の宅に虚無僧姿で訪れてきた本蔵は、すでに由良助一家の自分への思惑をすべて読みとっていました。塩治判官を松の間で抱き止めた行為が、判官の胸中に遺恨を残した、その遺恨を雪ぐのが現在の真の目的です。(歌舞伎通)
- 12) 戸口の監視カメラが室内用のモニターも兼用しているのは、蘭馬以外は美加しか知らない秘密だ。この有能な女探偵は、合鍵で蘭馬の部屋へ入るとき、必ず手渡されたりモコンで、内部を確認する。職業的本能ともいえるべき行動が、間一髪の危機を救ったのだ。(紅蜘蛛男爵)
- 13) 東下した尊氏の大軍は八月末、北条勢を大破して鎌倉に入った。時行の鎌倉支配はわずか二十日間のはかなさだった。尊氏の鎌倉入りは、奥

州情勢を大きくゆるがす。(陸奥南部一族)

- 14) ところが、「イメージの中での配偶者殺し」に気がついたカウンセラーが、「現実の配偶者殺し」と取り違えて騒ぎたてたり、早まってはいけないと説得にかけると、その絶望的な心情に共感してくれると期待していたクライアントの方があわててしまう。カウンセラーの突然の裏切りは、彼の心を深く傷つけ、彼はただ一人で救いのない無明の世界に落ちていくほかはなくなるのである。(「未練」の心理)
- 15) ゼンッ！脇腹に重い衝撃があった。烈膳が折れた仕込み刀で涼子を胴斬りにしたのだ。その一撃が、勝負を分けた。烈膳の顔に初めて驚愕の色が走る(リアルバウトハイスクール)
- 16) 皮肉と言ったのは、漢民族が自らの欲望を満たすために行なった様々な政策が、彼等を刺激し成長させ、結果において中原の覇権を奪われるまでに至ってしまったことだ。(逆説の日本史)
- 17) 平成十六年十二月のスマトラ沖大地震・インド洋津波災害、平成十七年9月のハリケーン・カトリーナの被害や十月のパキスタン・イスラム共和国地震災害などの海外での大災害も記憶に新しいが、災害や緊急事態等が発生した際には、一刻も早い情報の伝達や収集が生死を分ける。(消防白書)
- 18) マクロ的観点からは構造調整は順調に推移しているものの、公務員数の大幅削減、公共料金的大幅値上げ、輸入制限等の諸政策が国民生活を圧迫し、民衆の不満が高まりつつある。(我が国の政府開発援助)
- 19) 特に、九州では大規模な森林破壊に陥り、今でも惨状をさらしております。こういった山林を回復しなければならない地区は日本全国至るところにあります。森林破壊がいかなる災害を引き起こすか、皆様よく御承知のとおりであります。(国会会議録)
- 20) たとえ、そうでなかったとしても、床の上に座らせるのと机に向かわせるのと、どちらがよく

勉強できるか、床の上の給食が子供の心にどんな傷を残すか。こうしたことの判断がつかないようでは、仕事に自信が持てないのは当然だと思う。(子供にいい親悪い親)

### ③ 人の内的な性質

本稿でいう人の内的な性質とは、人の心理状態、心理活動、感情、感覚、言語活動、体験を具体的に表す名詞のことを指す。その中身を規定する際に主として早津(2016)と佐藤(1990)を参考にした。早津(2016)では、「心理状態の内容やあり方を具体的に表す名詞」(p. 132)を《心理内容》タイプの名詞に分類し、「悲しみ」「安心感」「関心」「欲望」「感情」「意気」などの名詞を挙げている。佐藤(1990)では、使役文の主語のうち、人に関するものについて、「主語に、人間の内部で進行するできごと、人間に属する性質、状態、うごきをさしめす名詞があらわれることがある。これらを《内的な原因》とよんで(後略)」(p. 119)と述べ、心理的な状態を表す名詞、認識活動、思考・想像活動やその内容、体験などを表す名詞を挙げている。具体的に「不安」「劣等感」「忍耐」などがみられる。

このタイプの主語名詞は、②で述べた「行為」と同様、人が直接にあるいは間接に他者に働きかける行為者として機能しているのではなく、ある人の様々な内的な性質に特徴づけることによって事態が発生する原因として機能するものであると考えられる。次のような例がある。例21)の「安堵感」、22)の「放心」は人の心理活動を表す名詞であり、例23)の「不真面目」は人の態度を表す名詞である。例24)の「足の痛さ」、例25)の「口調」はそれぞれ人の感覚、人の言語活動の表現を表している名詞で、例26)の「体験」は佐藤(1990)でいう人の体験にあたる名詞であるといえる。

- 21) そのような厳しい状況にあって、たまたま欠席すると、そこで感じる安堵感は強烈だ。「今日一日を生きのびた」かのようにさえ感じられるかもしれない。この安堵感が、翌日の不登校行

動を強める。(不登校児の理解と援助)

- 22) アンヘル事故で動転している四郎の頭は、今また思いもかけぬスーパーカーの出現に、激しく混乱した。〈AMGベンツといい、ポルシェ九百五十九といい、いったいどうなっているんだ〉その放心が、一瞬の油断を喚んだ。左わきで、けたたましいブレーキ音が噴き上り、猛然と一台のクルマが突っ込んできた。(総統の午前零時)
- 23) 勤務時間にプライベートのゴルフ参加や、後継者の青年会議所参加、翌日の遅刻などはよく目につくケースである。組織人としてルールを逸脱することでは社員の労働意欲を無くさせ、経営者としての責任感や社会性の欠如が問われる。不真面目は人間的な信頼を無くすとともに社風にも不真面目さが出てしまう。(中小企業の再生ビジネス戦略)
- 24) たかだか7時間でも往復の通勤時間などを合わせると8時間半程度…ヒール高さ3センチでも恐ろしいほど足が痛い。今日は足の痛さが頭の痛さを引き起こして最悪。休憩は三十分。ずっと立っている。(Yahoo! ブログ)
- 25) 静かな口調が、車内の熱をさらに冷やした。日中問題が、かつての東西問題だとすれば、呉さんの問題提起は、先進国と発展途上国の間に横たわる南北問題のようである。(添乗員疾風録)
- 26) 故郷へ帰ってきてからも、また差別事件に遭遇した。入院していたとき、同室のひとが、彼の住所をみて差別発言をした。この体験が差別にたいする反発を強めた。戦後になって、引揚者が帰ってきた。(日本列島を往く)

### ④ 現象

最後に「現象」を表す名詞「現象名詞」に簡単にふれる。これまで考察した①～③のタイプに入らない、且つ事態が発生する原因として認められる名詞を、例えば、「事件」「対比」「要因」など、「現象名詞」に分類する。

次のような実例がある。

- 27) この時代は、安定した政治が実現した反面、派閥政治と金権政治の時代でもあり、ロッキード事件・リクルート事件などの腐敗・疑獄事件が政界を大きく揺るがした。(現代社会)
- 28) 中央アルプスのほぼ中央にあり、北に空木岳、南に仙涯嶺にはさまれ、山頂は緑のハイマツと岩稜との対比が人の目をとらえる。(山の神々いらすと紀行)
- 29) 「元禄から現代へ通じる因果律が、鯨島、酷井、蟻塚の惨劇という結果をもたらしたといえるでしょう。つまり、餓欲のままに富を収奪していく第二次十字軍に、聖なる第三次十字軍が戦いを挑んだというわけですね」沈黙があった。(妖少女)
- 30) ガラスの壁は、内と外の壁をとりはらい、その明るさとエーテル的な性格が、構造を支える軽やかな鉄筋コンクリートに高揚した気分をつけ加える。これらのガラスの特性はグロピウスにとって重要な感性的過剰をもたらす。(モダン・デザイン全史)
- 31) かりに倭がたびたび朝貢していたとしても、西晋王朝をとりまく情勢を考えると、魏王朝のように倭を重視し、「丁重に汝に好物を賜う」必然性はもはやなくなっていた。魏の三角縁神獣鏡がすでに四百面近くにおよんでいるのにたいして、西晋の鏡が日本列島に非常に少ないことは、このことを裏づけている。(戦いの進化と国家の生成)
- 32) 日蓮の方もこの十日ほどで鎌倉の様子を詳しく耳にしている。法華経を頼みとする者の数は日蓮の遠流で減どころか増えている。元国の来襲の噂が、鎌倉では持ち切りだ。それを何年も前から口にしている日蓮の存在が法華経を支えていたのだ。(時宗)
- 33) 波のように、光の群れがうちよせ、ひいてゆき、おそいばかり—音の波に、いくたびぼくたちは

ゆりあげられ、落とされ—そして…その中に、ひとすじの光明のように別の音が混じりこみ—「助かった」信の声を、にわかに激しくなった排気音がなかばかき消した。(猫目石)

- 34) ある通りの名前は、まず「純粹に響きの上で作用する」。この響きが、耳にある種の心地よさ、あるいは不快さを引き起こす。こうした感覚的な反応は、「意味」を担わされた普通名詞ではあまり生じない。(『バサージュ論』熟読玩味)

## 5.2 主語名詞が具体物を表す名詞の場合

具体物を表す名詞（以下「具体物名詞」とする）が原因主語として機能する場合、変化名詞と同様、主語は他者に働きかける行為者ではない。それは、その具体物が存在することで、あるいは事態の発生に影響するための何らかの性質が備わっていることによって他者に影響を及ぼすというのである。

この具体物名詞主語は2つに分けられる。一つは意味的に具体物それ自体に他の物と区別する独特の特徴を持つものであり、もう一つは事態の発生に影響する何等かの特徴が主語名詞の修飾要素によって具体的に表現されるものである。前者は「黒砂糖」(例 35)、「涼茶」(例 36)のような名詞で、後者は、「大量に撒かれたコマセ」(例 37)、「甘くすがすがしいラベンダーの精油」(例 38)、「暴力的なゲーム」(例 39)のようなものである。

例 35) では、「黒砂糖」が本来的に備わっている性質によって体温の上昇を引き起こすことを表し、例 36) では、「涼茶」が本来的に備わっている性質によって体の熱気をとるということを表しているといえる。一方、例 37) ～ 39) は、主語名詞の特徴が修飾要素によって示されている。例えば、例 37) では、コマセが1つ2つだけで「海を汚す」事態が引き起こされることはあまりなく、「大量に撒かれ」て、それが海の中で腐ってしまう、という2つの条件が揃うことで海が汚染されたと解釈するのが妥当であろう。



- 35) 黒砂糖は、体を温め、低体温からくる朝の不調を取り除いてくれる。(「前兆」に気づけば病気は自分で治せる)
- 36) 広東の人が、食べ物と中国医学を結びつけ、日常生活の中で体調維持や健康管理に熱心に取り組んでいることには、「老火湯はきずなのスープ」の章ですでに触れた。これに関して、彼らが特に注意し、恐れていることがある。それは、「熱気 [イッヘイ]」というものである。熱気や夏の暑さから、涼茶が広東人を救ってくれる。(香港・広州菜遊記)
- 37) 釣り客の帰ったあとの堤防や磯に捨てられた、おびただしいゴミの山。大量に撒かれたコマセ(寄せ餌)が海中で腐り、海を汚す。(雑想小舎便り)
- 38) スピリットオイルラベンダー…甘くすがすがしいラベンダーの精油は、精神的な緊張をほぐし、心のバランスを整えたり、頭痛や筋肉痛を和らげたりする作用があります。(氣エナジー・ヒーリング)
- 39) 暴力的なゲームが睡眠不足を引き起こす?『iNSIDE』より ゲームをプレイした後の影響というのはどの程度体に残るものなのでしょうか。(Yahoo! ブログ)

最後に、主語が人の姿である例を見てみる。例40)、41)の主語「姿」はそれぞれ「おれ」、「老人と犬」、いずれも人(あるいは動物)を指しているものの、事態を引き起こす行為者ではない。むしろその人の存在が事態発生(例40)では「千鶴の寂寥感を強めた」こと、例41)では「人気のない風景を強調している」こと)の原因とみたほうがよさそうである。

- 40) 千鶴のくちもとは、かすかに、アルコールのにおいを漂わせる。昨夜は山尾ばかりが深酔いし、千鶴はあまりたしなまなかったようなのに、今日は昼間から、飲んでいたのか。老いをさらし寝入っているおれの姿が、千鶴の寂寥感を強め

たのではないか。山尾は、そんな気がした。(薔薇忌)

- 41) 遠方の横断歩道を犬を引いた老人がゆっくりと渡った。車の姿も見えないのに横断歩道を渡る老人と犬の姿が、人気のない風景を強調している。(人間の証明)

### 5.3 主語名詞が時間／空間を表す名詞の場合

時間や空間を表す名詞が事態発生の原因として見られる例は数例しか観察できていない。佐藤(1990: 114)では、因果関係の使役文のうち、主語が時間や空間、場面を表すものと指摘し、次のように述べている。

この種の文が、ある状況のもとでおこる人間の心理的な変化をつたえているとすれば、主語に時間や空間、場面をさしだすこともあるだろう。

本稿の考察では、佐藤の指摘と一致したものもあれば(つまり、ある状況のもとで人間の心理的な変化がおこるところ)、そうでないもの(ある状況のもとで人間の心理的な変化以外の変化が起こるところ)もあることを観察した。次の例42)～44)は主語が時間を表す名詞の例で、はじめの2例が人の心理的な変化を表現しているといえる。3つ目の例44)では主語名詞の指している時間は物事を変化させるきっかけになるといえよう。また、主語が空間を表す名詞の例45)、46)は、その空間が特別に存在することによって事態が引き起こされることを表していると考えられる。

- 42) しかし皇帝に忠誠を誓うプロイセン狙撃兵部隊の活躍で革命は鎮圧される。メキシコ湾流の変化でドイツには氷河期が訪れるが、作者にとっては歓迎すべき天啓、「氷河期がわれわれを墮落から救い、わが民族は再び、享楽に溺れることのない、力強く、控え目で、労働の意欲に燃

えた民族になった。わが民族は健全化した」という解釈になる。(ユートピアの期限)

- 43) この恵まれない傭船小船の中にこそ、かつて見なかった人間同士の温かさや結束がありありと見られて、これまで思い悩んでいた私の卑小さと比べて、同じ年齢なのに、と思い切り打ちのめされ、身も心も蘇る心地であった。この船での一年間が私を失意のどん底からはしくも救ってくれた。(人は涙とともに蘇る)
- 44) 私は改めて、今うつろな目で私の前に立っている老婆を見つめた。時がすべてを浄化するというのは嘘だ。時間こそは、あらゆるものを腐蝕させ、醜いものに変え、美しい過去との対比を否応なく見せつける。それはいかにも残酷な魔法の儀式ではないか。(「おくのほそ道」全行程を往く)
- 45) 分散型エネルギー・リサイクル・サイバー空間が地球を救う? (21世紀社会変革へのメッセージ)
- 46) この話はピアダ(ブラジルの笑い話)にしてもできた話と思われる。インドネシアをブラジル

と読みかえても同じこと、どこか豊かな環境が生活のテンポをつくるのである。(借金国の経済学)

## 6. まとめ

本稿は、「主語が事態発生の原因である」タイプの無生物主語他動詞文の存在を再確認した上で、主語名詞が文中でどのように「原因」としての役割を果たしているかを見てきた。考察から、このタイプの主語名詞の特徴がある程度見えてきたと思われる。

このタイプの無生物主語他動詞文は、目的語に立つ物や事、あるいは人の心理的・生理的な状態が主語名詞の指す原因による影響を受けたり、変化したりすることの表現になるといえる。主語名詞が「原因」として解釈できるかどうかは、その名詞自体の語彙的な意味だけではなく、文の表す事態内容をも考慮しなければ判断できない。主語名詞が出来事名詞であっても、人の行為、感情などを表す名詞であっても、あるいは具体物名詞であっても、事態が発生する原因として認められる場合があるのである。

## 参考文献

- 青木博史(2006)「原因主語他動詞の歴史」『筑紫語学叢書Ⅱ—日本語史と方言—』風間書房 pp. 274-293
- 天野みどり(1987)「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151集 国語学会編 pp. 110-97
- 影山太郎(1996)『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版
- 佐藤里美(1990)「使役構造の文(2)—因果関係を表現するばあい—」『ことばの科学』4 むぎ書房 pp. 103-157
- 車魯明(2016)「無生物主語の他動詞文について」(修士論文)東京外国語大学大学院総合国際学研究科
- 車魯明(2018)「日本語書き言葉における無生物主語他動詞文—許容される条件をめぐって—」『日本研究教育年報』東京外国語大学日本専攻 pp. 17-34
- 鈴木容子(2006)「日本語の他動詞文におけるテ格と主語の意味役割」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部 第55号 広島大学大学院教育学研究科 pp. 241-25
- 崔瑞暎(2011)「人の無意志動作を引き起す使役文について—人主語の使役文と非常物主語の使役文の比較—」『日語日文学研究』第79輯 韓国日語日文学會 pp. 411-430
- 早津恵美子(2016)『現代日本語の使役文』ひつじ書房
- 前田直子(2007)「原因・理由表現とは」『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』科学研究費補助金研究成果報告書 方言文法研究会編

- 宮腰幸一（2012）「日本語結果表現に関する予備的考察」『論叢現代語・現代文化』Vol. 9 筑波大学人文社会科学部研究科現代語・現代文化専攻編 pp. 1-43
- 吉川武時（1976）「無生物主語をめぐる問題点について」『日本語学校論集』第3号 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校（留学生日本語教育センター）pp. 123-137

#### 調査資料

- 小野不由美（2003）『くらのかみ』講談社
- 角田光代（2007）『八日目の蝉』中央公論新社
- 川端康成（1971）『雪国』講談社文庫（初出1937年）
- シナリオ作家協会（2002）『'01年鑑代表シナリオ集』映人社
- 夏目漱石（1950）『坊ちゃん』新潮文庫（初出1906年）
- 福田靖、大竹研、田辺満、秦健日子（原作）（2001）『HERO』扶桑社
- 古沢良太（2012）『リーガルハイ』扶桑社
- 東野圭吾（2008）『流星の絆』講談社
- 本多孝好（2005）『MOMENT』集英社
- （2006）『FINE DAYS』祥伝社
- （2007）『正義のミカタ～I'm a loser～』双葉社
- （2012）『WILL』集英社
- 吉本ばなな（1998）『キッチン』角川文庫

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』国立国語研究所  
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>（最終確認日：2017年11月30日）

#### 注

- 他に例えば、「台風が進路を変えた」「リンゴが甘みを増した」のような文について、筆者は同様に考えている。即ち、それらは「事実上自動詞述語文に相当するもの」タイプである。（査読者のコメントによって補足した。）
- 下線は影山（1996：197）による。
- 佐藤（1990）と早津（2016）では使役文を対象に述べているが、事態の発生を引き起こす「原因」についての判定は無生物主語他動詞文においても参考になると言えよう。
- 本稿では主語名詞が事態発生の「きっかけ」とみなすものもこのタイプに属するとみて、それを一括して「原因」と呼ぶ。
- 「行為者」と「原因」は実際には明晰に分けることができず、連続しているといわざるを得ない。その認識に立った上で、本稿は、「原因主語」タイプがその他のタイプと異なる特徴があると主張するにあたって、両者をこのような意味的な特徴から区別する。
- 国立国語研究所によって開発され、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築したコーパスである。書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって1億430万語のデータを格納しており、各ジャンルについて無作為にサンプルを抽出している。「中納言」はコーパスを検索することができるWebアプリケーションである。短単位・長単位・文字列の3つの方法によってコーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索を行うことができる。（国立国語研究所コーパス開発センターホームページより）
- 漢語サ変動詞の場合、【キー：語彙素が（指定した漢語サ変動詞）、後方共起1：書字形出現形がする】のように設定している。
- 車（2016）では実例数が1万例以上ある「受ける」と「変える」の2語については、「中納言」の出力順の上位3,000例をとって調査している。本稿はこの2語の調査をそのまま使用することにした。

- 9 他のタイプの他動詞文の用例数はそれぞれ、「人に準じるものが主語に立つもの」は 1,478 例 (22.5%)、「事実上人の行為の表現になっているもの」は 1,157 例 (17.6%)、「事実上自動詞述語文に相当するもの」は 2,423 例 (36.9%)、「その他」は 239 例 (3.7%) である。
- 10 「主語名詞が具体物を表す名詞の場合」は 249 例で、「主語名詞が時間／空間を表す名詞の場合」は 9 例である。
- 11 宮腰 (2012) は、「本稿は、(ある状態／位置から別の状態／位置への移行という) 普通の意味での<変化>に加えて、<発生>と<消滅>も (それぞれ無から有、有から無への状態移行とみなせるので) 広い意味での<変化>とみなす」(p. 37) と述べている。宮腰 (2012) では「変化」を、変化を表す動詞を対象に規定を行っているが、その規定は変化を表す名詞の場合にも言えると考えている。